

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 松元洋介

論 文 題 目

A Minimalist Approach to Preposition Stranding and  
Pied-Piping in English

(英語における前置詞残留及び随伴へのミニマリスト・アプローチ)

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	大室剛志
委員	名古屋大学教授	田中智之
委員	名古屋大学教授	佐久間淳一

### 【本論文の概要】

本論文は、英語における前置詞残留及び随伴について最新の生成文法理論の枠組みであるミニマリズムにおいて考察し、前置詞残留については歴史変化を説明すること、随伴については現代英語における統語特性を説明することを目的とする。

第1章では、英語における前置詞残留及び随伴に関する統語特性を概観し、それが提起する経験的・理論的問題と本論文の構成を述べている。

第2章では、先行研究も参考にしつつ、英語の前置詞残留の歴史的発達について歴史電子コーパスを用いた独自の調査を行い、古英語ではその分布が非常に限られていたのに対し、中英語ではその分布が大幅に拡大したことを明らかにしている。この歴史変化は、古英語においては、前置詞がその目的語に内在格を与えていたが、中英語ではそれが消失したことに起因すると主張する。この消失により、前置詞句の統語構造がPPからpPへと変化した。この統語構造の変化とFox and Pesetsky (2005a)の循環線形化のメカニズム（この場合であれば、前置詞とその目的語名詞句が循環領域ごとで順序矛盾を起こさない限り前置詞残留が許される）との相互作用により、問題の歴史変化に説明を与える。さらに、同一の相互作用により、前置詞残留の通言語的側面も説明する。

第3章では、現代英語の定形節における随伴について論じている。先行研究で散発的に指摘されてきた言語事実を整理することで、関係節と疑問文では随伴の振る舞いが異なることを明らかにしている。この事実を捉えるために、関係節での随伴のメカニズムと疑問文での随伴のメカニズムを分けることを新たに提案している。関係節に関して、それを話題化の一種とし、先行詞と関係節を関係付けるために繰り上げ分析をとる。この分析のもとでは、主要部名詞か抽象的名詞句が随伴された句の指定部位へ繰り上がることになるが、この繰り上げがPIC, LBC, 主語条件に違反しなければ、関係節における随伴が許され、それらの条件に違反すれば許されないと説明される。疑問文での随伴は、それに対し、従来の素性浸透をPesetsky and Torrego (2007)の素性共有による一致として述べ換えることで捉えられるとする。

第4章では、英語の不定詞関係節において主語が顕在せずに関係代名詞が顕在する時、前置詞残留は許されず随伴が許されるという特異性に対して、原理的説明を与えることを試みている。不定詞関係節の構造を再考し、その全体の構造はCPではなくpPであるとし、不定詞の前にあるfor句は不定詞の主語ではなく、先行詞の名詞に付加されているか、主節の要素であると考え。この再考した構造に基づき、Pesetsky and Torrego (2001, 2004)で提案された経済性条件を採用することで、前置詞残留をするよりも随伴する方が派生に關与する移動の数が少なくなることから、問題の特異性が原理的に説明されると主張する。

第5章は本論文の結論にあてられている。

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の評価】

英語の前置詞残留については、現代英語に関する共時的研究はあるものの、その歴史変化の実態を歴史電子コーパスによって明らかにした研究もなければ、その歴史変化に対して最新のミニマリズムの枠組みを用いて理論的な説明を与えた研究となると皆無である。また、現代英語の随伴現象に関しては事実面での整理が適切になされておらず、生成文法の枠組みからの分析はいくつかあるが、それらの分析には不備がある。更に、現代英語の不定詞関係節に見られる随伴の特異性に関しては、いまだに原理だった説明がなされていない。この研究の空隙を埋めるべく、最新のミニマリズムの枠組みから果敢に挑戦したのが本論文であり、そこには英語の前置詞残留と随伴について事実面と理論面において多大な貢献が含まれており、非常に高く評価される。

事実面では、第2章で、歴史電子コーパスを用いて独自の調査を行い、英語の前置詞残留は、前置詞の目的語が代名詞の時と顕在的な関係代名詞が出現しない *pe* 関係節と不定詞関係節の時とに限られるのに対し、中英語ではその分布が大幅に増大したという歴史変化の事実を明らかにした点が評価できる。第3章で、先行研究で散発的に指摘されてきた随伴に関する事実を整理することで、同じ *wh* 節でも関係節と疑問文では随伴に関する統語的な振る舞いが著しく異なることを掴んだ点も評価できる。

理論面では、第2章で、前置詞残留の歴史変化を中英語における前置詞からの内在格付与の消失に起因するとし、これにより前置詞句の統語構造が *PP* から *pP* へと変化し、この統語構造と Fox and Pesetsky (2005a)の循環線形化のメカニズムとの相互作用によって、この歴史変化に説明を与えることに成功した点が非常に高く評価できる。更にこの相互作用によって、前置詞残留の通言語的側面までも説明した点も評価できる。第3章の貢献としては、関係節と疑問文での随伴の相違を理論的に説明し得た点である。随伴のメカニズムを2つに分け、関係節に関しては繰り上げ分析を採用し、繰り上げが制約の違反を引き起こさない限りにおいて随伴が許されるとし、疑問文では、Pesetsky and Torrego (2007)の素性共有による一致により随伴を捉えた点である。第4章の貢献は、不定詞関係節に見られる随伴の特異性を、不定詞関係節の構造自体を再考し *pP* であるとし、Pesetsky and Torrego (2001, 2004)で提案された経済性条件を採用することで一応の説明を与えた点である。

ただし、本論文の考察に問題がないわけではない。表記上のミスが多少見られた点、章によって前置詞句の資格に関して不整合が見られた点、第4章の経済性条件に関して踏み込んだ考察が不足している点である。

しかし、これらの問題は今後の研究により克服可能であり、英語の前置詞残留と随伴に関する最新の生成文法理論による本論文の価値を損ねるものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与されるに相応しい水準の研究であると判断した。